上野の森オルガンシリーズ2020

変奏 Variations

- 装いを変える音 -

2020.11.8 sun 15:00 開演

東京藝術大学奏楽堂

主催：東京藝術大学演奏藝術センター・東京藝術大学音楽学部

音の世界は、時の芸術。生きとし生けるものの営みのように、一瞬たりとも歩を止めず絶えず変化していきます。しかし、変わらないものも存在します ― それは、変奏曲において「主題」とよばれる音の集まりです。曲を通じてその本質を変えず、装いを様々に変化していくさまざまな主題と変奏。今年の上野の森オルガンシリーズでは「変奏曲」を取り上げ、神秘的なヴァリエーション(変奏曲)の世界を、オルガン・チェンバロ・映像で展開します。

前半は、ルネッサンス・バロック時代の舞曲形式によるオスティナートバス主題の代表的な作品、後半は、現代までの幅広い時代から、モノクロから極彩色までのカラフルな変奏ワールドをお届けします。ぜひお聴きください。

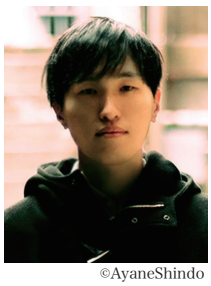
東京藝術大学音楽学部器楽科オルガン専攻主任・教授
廣江理枝

廣江 理枝　オルガン

東京藝術大学大学院オルガン専攻修了。DAAD(ドイツ学術交流会)奨学金を得てハノーファーならびにシュトゥットガルト国立音楽演劇大学に学び、ドイツ国家演奏家資格取得。オーデンセ、武蔵野市国際オルガン・コンクール最高位、シャルトル大聖堂国際オルガン・コンクール第1位および聴衆賞受賞。世界各地を巡るツアーの後、帰国。多岐にわたる録音・演奏活動のかたわら、多くの国際コンクールの審査員を務める。東京藝術大学音楽学部器楽科オルガン専攻教授・主任。(一社)日本オルガニスト協会理事、日本オルガン研究会会員、東京ドイツ語福音教会オルガニスト。

大塚 直哉　チェンバロ

東京藝術大学音楽学部楽理科を経て同大学院チェンバロ専攻を修了。またアムステルダム音楽院にてチェンバロとオルガンを学ぶ。アンサンブル・コルティエ、バッハ・コレギウム・ジャパンなどの通奏低音奏者、チェンバロ・オルガン・クラヴィコードのソリストとして活躍。「トッカーレ[触れる]」(ALM RECORDS)ほか録音多数。東京藝術大学音楽学部器楽科古楽専攻教授。国立音楽大学非常勤講師。宮崎県立芸術劇場・彩の国さいたま芸術劇場ほかのオルガン事業アドヴァイザー。NHK/FM「古楽の楽しみ」解説者。



©AyaneShindo

植村 真　映像

演出家・美術家。名古屋造形大学業、東京藝術大学美術学部大学院先端芸術表現専攻修了。演劇を中心とした舞台の演出を主に近年照明や映像を国内外の領域を横断したアーティストと協働する。近年の主なプロジェクトに藝大プロジェクト2019/上野の森オルガンシリーズ(映像・演出)、藝大附属図書館/IRCAオープニングイベント『歓喜の杜』(美術・演出)、『無人演劇祭』於仲町の家(企画・会場構成)、『鍵-THE KEY-』於平櫛田中邸(照明)など。

Program

J.S.バッハ：《パッサカリア》ハ短調 BWV 582
Johann Sebastian Bach (1685-1750)： Passacaglia in c, BWV 582
演奏: 廣江理枝(オルガン)

C.Ph.E.バッハ：《スペインのフォリアによる 12の変奏》
Carl Philipp Emanuel Bach (1714-1788) : 12 Variations auf die Folie d'Espagne
演奏: 大塚直哉(チェンバロ)

G.フレスコバルディ：《ロマネスカのアリアによるパルティータ》
Girolamo Frescobaldi (1583-1643)： Partita sopra l'aria della Romanesca
演奏: 廣江理枝(ポジティフオルガン) 大塚直哉(分割鍵盤を伴ったイタリアン・チェンバロ)

J.S.バッハ /大塚直哉編曲：
Johann Sebastian Bach – arr.by Naoya Otsuka :
《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第 2番》 BWV1004より**〈シャコンヌ〉**
Ciaccona in a from “Partita No. 2”, BWV 1004
演奏: 大塚直哉(チェンバロ)

— 休 憩 Intermission —

J.アラン:《クレマン・ジャヌカンの主題による変奏曲》
Jehan Alain (1911-1940) : Variations sur un thème de Clément Janequin
演奏: 廣江理枝(オルガン)

F.クープラン：《フランスのフォリア、または色とりどりのドミノ》
François Couperin (1668-1733) : Les Folies françoises,ou les Dominos
演奏: 大塚直哉(チェンバロ)

武満 徹：《夢見る雨》
Toru Takemitsu (1930-1996) : Rain Dreaming
演奏: 大塚直哉(チェンバロ)

J.ジョンゲン：《英雄ソナタ》作品 94
Joseph Jongen (1873-1953) : Sonata eroïca Op.94
演奏: 廣江理枝(オルガン)

廣江 理枝　大塚 直哉

J.S.バッハ：《パッサカリア》ハ短調 BWV 582

前半のテーマ「バロック時代の変奏」の幕開けは、バロックの天才J.S.バッハの《パッサカリア ハ短調 BWV582》です。この種の変奏曲は、本来舞曲として生まれたものが多く、中でも３拍子のパッサカリアとシャコンヌは似通った性格をもち、同一視されることもしばしばあります。バッハはオルガンのために –おそらく北ドイツのブクステフーデ達から影響を受けて– 1曲のパッサカリアを作曲しました。バッハ・オルガン作品を代表する名曲の一つですが、実は彼が20代前半に作曲したものです。その後、自作を常に改良していくバッハらしく時に応じて細かい改訂を繰り返しましたが、初期稿が持っている大筋は変化していません。19世紀の音楽家・ペータース版バッハ全集の編集者グリーペンケルルが、様式から推測して「ゴールドベルク変奏曲（晩年の傑作）と同じ時代に書かれたに違いない」と判断してしまったのも無理がないほど巨匠の筆を示しています。

バッハがつけたオリジナル・タイトルは《パッサカリア》ですが、実際は８小節からなる主題と20のパッサカリア変奏、そしてフーガが続きます。パッサカリア主題前半（＝フーガの主題）は、アンドレ・レゾンの《第2旋法によるオルガン・ミサ》中の〈パッサカリアによるトリオ〉と全く同じ旋律なので、おそらくバッハがそこから借用したと考えられています。（廣江）

C.Ph.E.バッハ：《スペインのフォリアによる 12の変奏》

大バッハの次男カール・フィリップ・エマヌエルの作品は、名手であった彼を彷彿とさせるような、鍵盤上のさまざまな演奏効果が駆使されていますが、とりわけ聞いている人を思いもかけない場所に連れていってくれるような、独特の和声法が魅力的です。彼の世代の作曲家にとって「古めかしい」――おそらく「おじいちゃんやひいおじいちゃんたちがよく使っていた」というような感じだったのではないでしょうか――和声モデルであった「スペインのフォリア」の定型バスを用いて、「フォリア＝狂気、狂乱」の名にふさわしい、大胆な12の変奏を繰り広げてゆきます。（大塚）

G.フレスコバルディ：《ロマネスカのアリアによるパルティータ》

「フォリア」「パッサメッツォ」など、あるきまった低音主題（とそれに付随する和声）を繰り返しながら、その上で次々と変奏が繰り広げられるような定型バスを、イタリアでは「アリア」と呼ぶことがありますが、この「ロマネスカ」も、そのような美しいアリアの一つです。多くの場合、即興的に演奏したであろうと考えられますが、歌曲として、また鍵盤曲としてなど、作品の形でも様々に残されています。17世紀前半にローマで活躍した天才・フレスコバルディの作品は、鍵盤楽器に「うた」を歌わせようとして工夫した彼らしく、踊れるようなリズムを伴ったものよりも、さまざまな音型や和声の綾を駆使して美しく編み上げられたレチタティーヴォのような変奏が多いのが特徴です。記念碑的な『トッカータ集第1巻』の初版（1615年）に収められた後に、約1年後に出版された第2版では拡大・改訂されます。本日はこの改訂稿のほうを、ポジティフオルガン（ガルニエ作）と、分割鍵盤を伴ったイタリアン・チェンバロ（レイト作）を、交互に用いてお楽しみいただきます。どちらの楽器も、当時盛んに使われていたミーントーン（中全音律）に調律して演奏いたします。とくにレイト作のイタリアン・チェンバロには、このミーントーンという調律法で現れる「異名異音」（レの♯と、ミの♭などが同じ鍵盤にならない）に対応するために、「分割鍵盤」が使われているという珍しい楽器です。＊注）（大塚）

＊注）この楽器は、卒業生である小田（旧姓 杉村）式子氏からの寄付のお申し出によって大学への購入が実現し、学生たちがミーントーン調律法による演奏を研鑽できる貴重な楽器として活躍しています。この奏楽堂での演奏会では本日初公開となります。この場をお借りして、小田（旧姓 杉村）式子氏とそのご遺族に心より感謝申し上げます。

J.S.バッハ/大塚直哉編曲：《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番》BWV1004より〈シャコンヌ〉

原曲は、《無伴奏ヴァイオリンのためのパルティータ第2番》の第5曲（終曲）として知られるもので、日本では「シャコンヌ」とフランス語読みされることが多いですが、原曲は「チャッコーナ Ciaccona」とイタリア語で表記されています。バッハの弟子の一人アグリコラの証言によれば、バッハ自身はこれらの無伴奏曲を鍵盤楽器でも演奏したとのこと。実際に、ソナタ第2番や第3番に関してはバッハ自身（あるいはバッハの弟子）の手になると思われる鍵盤用ヴァージョンが残されています。これらに倣って今回は4度下げたイ短調に移調し、演奏者自身が「必要と思われる和音を加えながら fügte von Harmonie so viel dazu bey, als er für nöthig befand」（アグリコラ）演奏します。ラーソーファーミという、たった4音の下行バス主題の上に、252小節の大変奏が繰り広げられる様は奇跡的というほかはありません。3部分に分かれ、中間部分では同主調に転調します。（大塚）

J.アラン：《クレマン・ジャヌカンの主題による変奏曲》

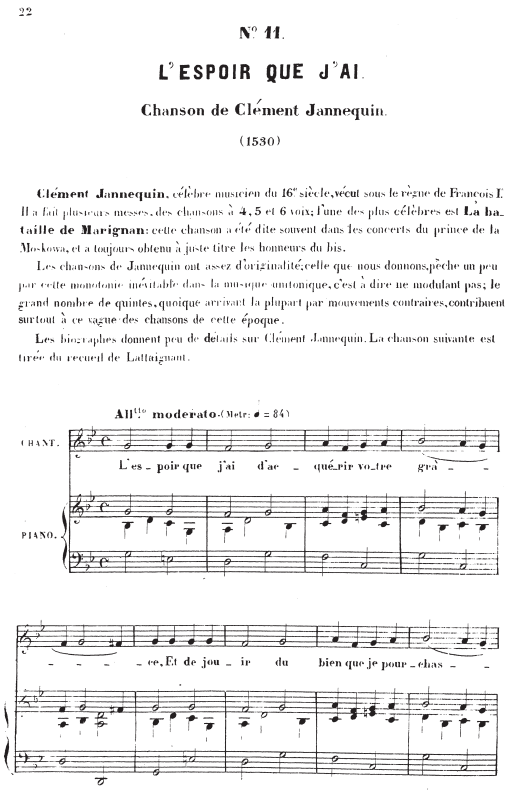
後半は、近現代の作品も含めて、華麗なる変奏の色彩をお楽しみいただきます。

ジャン・アランは、第２次世界大戦中に兵士として29歳の短い生涯を終えた、夭折の天才でした。音楽一家に育ち、父アルベールはオルガニスト、弟オリヴィエ（1918-1994）はオルガニスト・音楽学者・作曲家、妹のマリー＝クレール（1926-2013）は世界的に有名なオルガニストでした。サンジェルマン・アン・レーのアラン家には、アルベールが作ったオルガンがあり、一家はいつもオルガン音楽に満ちた生活を送っていたと思われます。

《クレマン・ジャヌカンの主題による変奏曲》では、16世紀のクレマン・ジャヌカンによるシャンソン〈私の希望 L'espoire que j'ai〉（1530）が主題として使われています。以下に歌詞をご紹介します。

L'espoir que j'ai d'acquérir votre grâce
Et de jouir du bien que je pourchasse
Me tient suspend en attendant votre appoint,
Mais, si de bref vous ne venez au point,
Force sera que d'aimer je me lasse.

あなたの寵愛を受け、追い求める幸せを享受するという望みは、
あなたがそれを示してくださる機会を待ちながら、私を留まらせるのです。
でも、もしあなたがすぐにその素晴らしいお気持ちを示してくださらないならば、
私は愛することにうんざりしてしまうでしょう。


22

N° 11.

L'ESPOIR QUE J'AI.

Chanson de Clément Jannequin.

(1530)

Clément Jannequin, célèbre musicien du 16e siècle, vécut sous le règne de François I. Il a fait plusieurs messes, des chansons à 4, 5 et 6 voix; l'une des plus célèbres est **La bataille de Marignan**: cette chanson a été dite souvent dans les concerts du prince de la Moskowa, et a toujours obtenu à juste titre les honneurs du bis.

Les chansons de Jannequin ont assez d'originalité, celle que nous donnons, pèche un peu par cette monotonie inévitable dans la musique uniforme, c'est à dire ne modulant pas; le grand nombre de quintes, quoique arrivant la plupart par mouvements contraires, contribuent surtout à ce vague des chansons de cette époque.

Les biographes donnent peu de détails sur Clément Jannequin. La chanson suivante est tirée du recueil de Lattaignant.

1853年にJ.-B.ヴェッケルランが伴奏を施し出版した《過去からの反響 Échos du temps passé》第1巻から、アランは31小節からなるこの編曲をそのまま引用して冒頭に置き、そのあと自らの変奏を続けました。第1変奏Maggioreは5度高く、主題と同じ書法を使いながらアランらしい幻想的な和声をつかってアレンジし、第２変奏Fugato – piu vivoでは原調にもどり、主題の冒頭のみを対位法的に展開、最後の第３変奏 Graveで前の変奏を思い出すかのような引用を折り込みながら、次第にルネッサンスの世界へと回帰していきます。（廣江）

F.クープラン：《フランスのフォリア、または色とりどりのドミノ》

17世紀から18世紀前半にかけてのフランスでは、「クラヴサン（＝チェンバロのこと）」がとても好まれ、多くの名手たちがいろいろな作品を残しています。その中でも、フランソワ・クープランの残した4冊の『クラヴサン曲集』は質、量ともに充実した重要なもので、オーソドックスな舞曲が並ぶ「規範的な」組曲もあれば、ちょっと皮肉が効いていたり、意味ありげな曲名が目を惹く性格的小品も含まれています。1722年に出版された『クラヴサン曲集第3巻』に収められたこの作品は、本来「スペインのフォリア」の名で当時のフランスで親しまれていた舞曲を主題として用い、テンポもリズムもどんどん形を変えながら12の変奏を繰り広げてゆくものです。あたかも「スペインのフォリア」を「フランス風に」換骨奪胎した、という意味のタイトルなのでしょうか。また、副題に「色とりどりのドミノ」とありますが、ドミノとは、当時の仮面舞踏会で着られたマントのこと。最初は「透明色」のドミノに始まり、最後は「どす黒い」色のドミノをまとって終わります。（大塚）

１.「純潔、透明のドミノをまとって」
２.「羞恥、ピンク色のドミノをまとって」
３.「情熱、肉色のドミノをまとって」
４.「希望、緑色のドミノをまとって」
５.「貞節、青色のドミノをまとって」
６.「忍耐、銀色のドミノをまとって」
７.「倦怠、紫色のドミノをまとって」
８.「媚び、色とりどりのドミノをまとって」
９.「年老いた伊達男と時代遅れの宝物係たち、緋色と枯葉色のドミノをまとって」
１０.「お人よしのかっこう（コキュ）たち、黄色のドミノをまとって」
１１.「無言の嫉妬、ムーア風の濃い灰色のドミノをまとって」
１２.「狂乱または絶望、黒いドミノをまとって」　（参考：J.クラーク、D.コノン著、見坊澄訳『人生の鏡』）

武満 徹：《夢見る雨》

1986年にアメリカで初演され、チェンバロの現代音楽の分野で先駆的な仕事をしたチェンバロ奏者のエリザベス・ホイナツカに捧げられています。冒頭に提示される、「2度の下行と跳躍する上行」からなる3音のモティーフが様々な形で変容・変奏されて展開してゆきます。チェンバロの音の魅力である、響きの減衰の美しさを生かした名曲で、20世紀の日本のチェンバロ曲を代表する作品といわれています。（大塚）

J.ジョンゲン：《英雄ソナタ》作品94

ジョセフ・ジョンゲンは、ベルギーのオルガニスト・作曲家でした。あらゆるジャンルに多数の作品を残しているものの、現在最も有名なのは、たびたび東京藝大モーニングコンサートにも登場する、オルガンと管弦楽のための《協奏交響曲 作品81》です。《英雄ソナタ 作品94》は、1930年にブリュッセルの芸術宮殿大ホール Grande Salle de Concerts, Palais des Beaux-Arts新オルガンの落成演奏会のために作曲され、自身の演奏で初演されました。6年後には、パリの聖ユスターシュ教会のオルガニストであったジョセフ・ボネに捧げられ、出版されています。

即興的なユニゾンの楽句で始まり、カデンツァ風なファンファーレが力強くソナタを導入し、そのあと静かに主題が姿を現します。民謡旋律を思わせるこの主題は、ジョンゲンが作ったオリジナル旋律です。デュプレを彷彿とさせる手法で2つの変奏が続きます。７や９の和音をふんだんに使用し、フランスから影響を受けた和声法を使用し、華やかで色彩的な展開部の後、主題がトゥッティ

の和音で登場し、最終的にフーガへと移行します。

作曲家はこの作品についての直接の示唆を残していませんが、フランクの《英雄的小品》からそのキャラクターを継承し、変奏手法と最後にフーガを置く構成をデュプレの《ノエルによる変奏曲》から学び、主題の概要はヴィエルヌの交響曲を彷彿とさせるなど、当時親交があり、ベルギーでもたびたび演奏していたパリのオルガニスト達から多大な影響を受けていることは確実です。タイトルとなった「英雄」が何を示すのか不明ですが、おそらく偉大な何かを讃える気持ちやその熱狂感を表しているのかも知れません。(廣江)

映像について　-二つの時間の流れ-

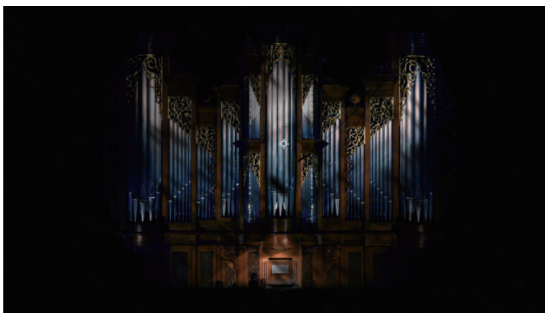
主題が形を変えながら繰り返されていく「変奏」をテーマとしていただいたとき、大きな時間の流れと小さな時間の流れについて考えました。大きな時間の流れとは、オルガンや古楽器の持つ深い歴史や文脈の流れです。美術史の中でも宗教画において聖書の主題が形を変えながら様々な画家によって描かれ、狩野派や琳派といった流派によって画風の受け継がれる日本画も少しづつ世代を超えて形を変えていきました。現在も現代美術などの諸分野で参照する文脈として引用しながら変化をさせています。バッハやベートーヴェンといった時代の作品が今も演奏され続け、多くの演奏家や指揮者らが解釈してきたことも、含めある種の変奏のように思えたのです。

一方、小さな流れは誰しもに訪れる一日といった短い周期の変化です。新型コロナウィルスによって一転した日常の中でも一日一日は少しづつ変化していき、情報も物質も更新しながら変奏されていく。パイプオルガンは通り抜ける風のようにチェンバロは細かく降る雨だれのように自然の変化のイメージとも結びつき、流転する風景を想起させます。

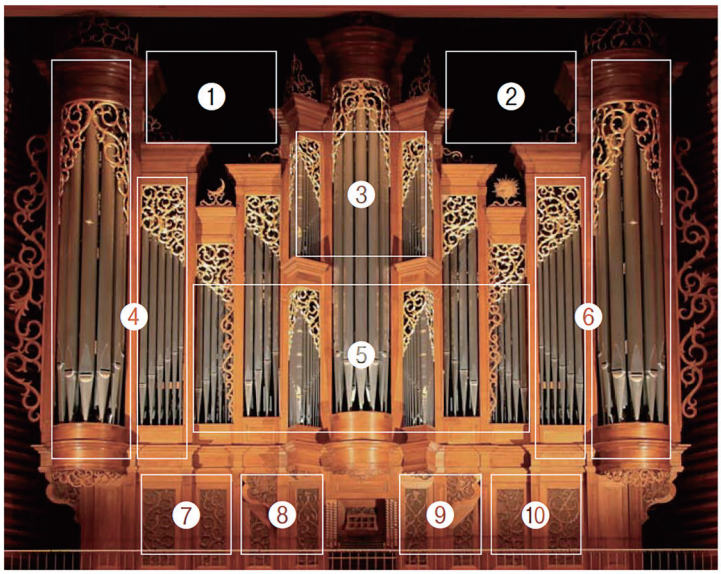
演奏会の前半ではそうした小さな時間の流れに目を向けて、自然現象や光、日常の風景を元にイメージを少しづつ変化をさせていき、後半では明確な変奏から自由な形式も含むことに合わせてパフォーマティブかつ色彩の要素の強い映像を撮影しました。《クレマン・ジャヌカンの主題による変奏曲》では昨年火災のあったノートルダム大聖堂をモチーフに修復を行っているかのような煤を用いた撮影を行い、《フランスのフォリア、または色とりどりのドミノ》では楽章ごとに与えられた色のイメージに対して「装いを変える」ような映像を撮影しました。映像を加えることによって音の世界を広げる一助となるようになればと思います。

植村 真（演奏藝術センター教育研究助手）

《クレマン・ジャヌカンの主題による変奏曲》の制作風景



撮影協力：進藤綾音（演奏藝術センター教育研究助手）



❶ Schwellwerk C-Seite
❷ Schwellwerk Cis-Seite
❸ Kleinwerk
❹ Pedal C-Seite
❺ Hauptwerk
❻ Pedal Cis-Seite
❼ Brustwerk C-Seite
❽ Mitteltönigwerk C-Seite
❾ Mitteltönigwerk Cis-Seite
❿ Brustwerk Cis-Seite

東京藝術大学奏楽堂(1999年6月完成)ガルニエ・オルガン仕様

Organ Specification, Sogakudo Concert Hall, Tokyo University of the Arts (June 1999)

Hauptwerk (I) C-g³	
Principal	16'
Prästant	8'
	(8+8 ab c1)
Rohrflöte	8'
Octav	4'
Spitzpfeife	4'
Quint	3'
Superoctav	2'
Mixtur	6-10f.
Scharf	5f.
Cornet	5f.
Trompete	16'
Trompete	8'
Trompete	4'
Vox humana	8'
Tremulant	Hw

Kleinwerk (II) C-g³	
Gedackt	8'
Salizional	8'
Quintatön	8'
Prästant	4'
Rohrflöte	4'
Nasat	3'
Superoctav	2'
Terz	1 3/5'
Sifflöte	1 1/3'
Mixtur	5f.
Fagott	16'
Dulcian	8'
Schalmey	4'
Tremulant	Kw

Brustwerk (III) C-g³	
Portunal	8'
Bordun	8'
Prästant	4'
Blockflöte	4'
Traverso	4'
Waldpfeife	2'
Terzian	2f.
Quintlein	1 1/2'
Scharf	4f.
Krummhorn	8'
Regal	4'
Tremulant	Bw

Schwellwerk (III) C-g³	
Nachthorn	16'
Principal	8'
Hohlflöte	8'
Und Maris	8'
Viola da gamba	8'
Octav	4'
Violetta	4'
Rohrgedackt	4'
Nasat	2 2/3'
Flageolet	2'
Mixtur major	5f.
Mixtur minor	4f.
Fagott	16'
Trompete	8'
Trompete	4'
Oboe	8'
Tremulant	SW

Mitteltönigwerk (I) C,D,E,F,G,A,B,H-d³	
Coppel	8'
Spitzflöte	4'
Principal	2'
Quintflöte	1 1/3'
Regal	16'
Trichterregal	8'
Schalmey	4'
Bass	8'(Pedal)
Tremulant	MW

Pedalwerk C-f¹	
Bordun	32'
Prästant	16'
Subbaß	16'
Octavbaß	8'
Gedackt	8'
Principal	4'
Nachthorn	4'
Mixtur	6 f.
Posaunenbaß	32'
Posaunenbaß	16'
Trompete	8'
Trompete	4'
Cornet	2'
Tremulant	PW

III/II, III/I, II/I, III/P, II/P, I/P Assist. II/I - III/I }HW⇔MW, BW⇔SW Terz-Nasat⇔Sesquialtera(KW) Nachtigall, Zimbelstern Sw-Speichern
HW, KW, BW, SW: a1=440 Hz, nE 8 MW: Meantone temperament, 981 combinations

発行：2020 年 11 月 8 日（日）
編集：東京藝術大学演奏藝術センター
〒 110-8714 東京都台東区上野公園 12-8
TEL：050-5525-2300

デザイン：植村 真（演奏藝術センター教育研究助手）
※無断転載・複写・引用などを禁じます。